

博士論文概要

大学時代の正課外活動と社会人生活との関連に関する研究
－「体育会系は就職に有利」という言説に着目して－

大学院教育発達科学研究科 教育科学専攻
博士後期課程3年 金森 史枝
指導教員 蛭田 秀一

1 研究目的 (序章)

本論文の目的は、「体育会系は就職に有利」という言説を分析枠組みとして、大学の正課外活動(特に体育会系)を通して学生がどのような能力を培っているのか、また、大学時代の正課外活動の取り組みは就職やその後の社会人生活にどのような影響を与えているのかという点を明らかにし、体育会系とそれ以外の者との比較検討から大学教育における正課外活動の意義についても検討することである。なお、本論文において「体育会系は就職に有利」という場合の「就職」については、採用段階のみならず就職後の昇進・昇格に至るまでと定義する。

2 先行研究の検討 (第1章)

わが国の高度成長期において体育会運動部出身者が有する体力や精神力などの特性が企業から求められ、特に日本的雇用慣行下の長期雇用を前提とする内部労働市場において、体力、忍耐力、協調性、人間関係構築力に長けた体育会系人材がより適応する好ましい人材として重宝されてきた。しかし、1990年代以降の経済状況等の変化に伴う企業が求める人材の変化、大学生の特性の変化、就職のあり方の変化等を経てきた現在、「体育会出身者は就職に有利」という言説はどのように把握されているのだろうか。本論文では、全国規模のインターネット調査に基づく量的研究とインタビューによって個別事例を詳細に分析する質的研究の両方法を用いた9つの研究を企画して分析及び考察を行うことにした。

3 9つの研究概要 (第2章から第4章)

第2章では、「現役大学生の特性」を把握する目的で2つの研究を行った。まず、「研究1」では「何事もほどほどに」に重点を置いて大学生活を送る学生が漸次増加していることに着目して分析を行った。「何事も〈適当

に過ぎず」というネガティブな学生」に加えて、「活動度が高く何事も〈適度〉に活動的なポジティブな学生」が相当数含まれており、「何事もほどほどに」を選択する学生には二種類の学生が併存していることを明らかにした。次に、「研究2」では、産業界が求める人材と現役大学生の特性がいかなる点で乖離しているかについて現役大学生の特性を質的に分析し、過半数の学生に「主体的になれない態度」と析出される特徴がみられた。

第3章では、「現役大学生のうち体育会運動部に所属する大学生の特性」を把握する目的で3つの研究を実施した。まず、「研究3」では、体育会運動部に所属している現役大学生は、体育会運動部で週3日以上活動している者が約7割占めており、さらに、週に3日以上活動している者は、週3日未満の者と比較して忍耐力・継続力、精神力・集中力という自己力(自分自身を高める力)の獲得意識がより強いことが示唆された。次に、「研究4」では、体育会運動部の現役大学生はその活動を通してどのようなことを習得していると認識しているかについて分析した。その結果、「人間関係・上下関係・礼儀作法」「チームワーク・協調性・仲間」「体力・競技技術」「努力・忍耐力・精神力」「社会性・教養・経験」「人間形成・思考力」「主体性・リーダーシップ」「コミュニケーション力」に分類される力にまとめられた。さらに、「研究5」では、ある医師を目指す大学生Aさんに着目し、Aさんが競技としてのスポーツと学業のバランスの取り方に幾度となく悩みながら、将来の夢である医師という職業を目指して直面する課題を克服していく過程を質的に分析した。勉強との両立を図る際の葛藤とその克服を繰り返し精進していく「現代的文武両道モデル」が導出された。

第4章では、「大学時代の正課外活動の違いが社会人生活にどのような影響を与えているのか」について4つの研究を実施した。まず、「研究6」では、体育会運動部と体育系サークルとの所属の違いに着目して、社会

人 (N=400) を対象に調査項目である「大学時代の過ごし方」20項目と「社会人である現在の意識」22項目の回答から、大学時代の体育系正課外活動への参加が社会人生活に及ぼす影響について、「所属」と「勉強との両立」による二要因分散分析を行った。その結果、所属の主効果には両群間に大きな違いはみられなかったが、体育会運動部所属者には、仕事の満足度を含む一部の項目について勉強との両立の有無で有意な差が見られ、両立者の方が高い得点を示した。また、勉強との両立の主効果として、両立者の方が忍耐力、コミュニケーション力、人間関係構築力が有意に高いことが明らかとなった。次に「研究7」では、社会人 (N=600) を対象として、大学時代の正課外活動の所属を体育会運動部、体育系サークル、文化部、文化系サークルに分けて同様の分析を行った。その結果、男性では勉強と両立していた体育会運動部所属者は最高得点の項目が多かった。一方、女性では勉強と両立していた文化部や文化系サークル所属者にも得点の高い項目があり所属の違いの影響は小さかった。これらの結果から、「体育会系は就職に有利」という言説の成立には「勉強との両立」という前提条件が必要であることが示唆された。さらに、「研究8」では、大学時代の正課外活動の違い (体育会系、文化系、他の取り組みをしていた、何もしていなかった、の4区分) が社会人生活における仕事の充実度やワークライフバランスにどのような影響を及ぼすのか、また、現在のスポーツ実施状況の有無が社会人生活とどのように関係するかという点について、社会人 (N=800) を対象に「所属」と「現在のスポーツ実施状況」による二要因分散分析を行った。その結果、まず、男性の体育会系出身者はほとんど全ての項目でトップの得点であった。このことは、「体育会系は就職に有利」という言説が、他の所属との比較において現在もなお通用することを示していると考えられた。次に、ロジスティック回帰分析の結果から、大学時代に体育会系に限らず「体を鍛えていた」ことは、「現在のスポーツ実施状況の有無」と密接に関連し、そのことがスポーツ活動を伴ったポジティブな社会人生活の実現につながっていると推察された。また、「研究9」では、幼少期から取り組んだ剣道を通して培った力が仕事にいかにか活かされたかについて、ある大企業に勤務していた男性へのインタビューデータを質的に分析して考察した。

4 総合考察 (第5章) 及び結論 (終章)

男性の体育会系出身者は、社会人として有用とされる本論文で設定した自覚的能力を有している割合が高い傾向にあり、また、「体育会系は就職に有利」というには、「勉強との両立」が求められることが明らかとなった。大学の体育会運動部活動では、まず、スポーツの成績向上を目指した練習やトレーニングに取り組む努力、部内組織における人間関係の構築 (特に上下関係や監督・コーチとの関係)、試合に負けた時の悔しさやケガや体の不調を克服することなどの直面する諸課題を乗り越える経験によって、社会人として活躍するための「さまざまな力」を培っている。次に、「勉強との両立」では、授業に出て定期試験や課題に向かいゼミ活動等にも参加することで専門能力を獲得し、また、両立のためのタイムマネジメントも行っている。さらに、スポーツと勉強との両立に葛藤と克服を繰り返して自己研鑽に励み人格を陶冶していると推測される。つまり、体育会系で勉強と両立していた者は、大学の正課教育とスポーツ活動を通して、さらにそれらを両立しようと努力することによって、職業キャリアの形成に必要な力を、他の活動の者と比較してより多く得ていることが考えられる。これらの力が社会人生活において日々直面するさまざまな課題に対峙するたびに、組み合わせられ融合されて課題を解決していく力に「変換」されるのではないかと推測された。本論文で得られた知見から、大学の正課外活動は正課教育と両輪の如く多くの力を涵養する場であることを示した。そして、大学における学生支援は、学生が正課及び正課外のカリキュラムやプログラムをバランスよく学べるよう支援するという原点に立ち返ることの重要性を指摘した。

本研究では、従来明らかにされてこなかった大学における体育会系をはじめとする正課外活動が社会人生活に与える影響についていくつかの分析結果を提示することできた。しかし、大学における正課外活動が社会人として求められる能力の形成に与える影響等を明らかにするには、本研究のみでは不十分であり多くの課題が残されている。今後も大学における体育会系をはじめとする正課外活動と社会人としての活躍に必要な能力とのレリバンスに関する検討を引き続き行い、知見の蓄積に努める必要がある。